

桜の開花 桜の年輪)

・別れ 出会い 記憶重なる・

冬の寒さで成長を止めていた木々が、芽吹きと開花を境に静から動へと一気に跳躍し初める、その最前線に桜の開花がある。開花には花芽が冬の寒さに曝されなければ咲かないという春化作用が必要で、動きのない寒を経て暖かな動の開花につながるという構図となつていて。

静から動へと移ろう桜の季節に、ある人は定年退職で職場を去り、ある人は転勤で新しい任地へ向かい卒業生が去つて新入生を迎える。まだ蓄の固い北国、何分咲きかの東国、満開で桜吹雪の西国とそれぞれ土地と風土で桜の花のもとに別れと出会いが年輪のごとく刻み込まれている。

年輪とは一年かけての造られた成長縞の濃淡模様である。樹の表皮のすぐ内側に成長の最前線である薄皮のような形成層がある。この薄い層のなかで木の細胞が生まれそして死に、繊維のような細胞膜の残骸が内側に

押し詰められて茎が太つて成長する。

気温が高い時ほど成長が速く春から夏は春材の淡い縞となり、秋から冬にかけては秋材の緻密な濃い縞となる。細胞の生と死、動と静の世界で凝縮された年輪が桜材でできた将棋盤の美しい柾目模様の姿となつて見せてくれる。

日本一長寿の桜は甲斐の山麓で年輪を刻み続いている『高神代ザクラ』と呼ばれている老木である。木の天然記念物の第二号のエドヒガンザクラで推定樹齢はおよそ千八百年、幽気が漂う巨木である。シダレザクラの日本一である樹齢七百年の福島県の『春滝ザクラ』など巨木の桜は、なぜか東日本から東北にかけて多いのも台風などの大風に出会うことが少ないからなのだろうか。

古代から悠久の時を超えて年輪の数だけの出会いと別れを見守り年輪への記憶を刻み込んでいる老木はこの一年をどう刻み込むのだろうか。

(村松 照男)